

陣野俊史 JINNO Toshifumi

1. ポーランのマダガスカル

運転手のラント（本当は「ムッシュ」と呼び掛けていたのだが、ここでは煩瑣になるため敬称を略す）は、しばらく考え込んだ後、「ドックスは自分たちが学校で使っていた教科書に出てきた。詩人であると同時に歌手であり、彼の歌はみんなが知っている。それと、そのフランス人（彼は私に名前を幾度も聞き返した。むろんこちらの下手な発音のせいであるのだが）は知らない。聞いたことがない」と言った。

「そのフランス人の名前は、ジャン・ポーランとあって、およそ100年前にこの島で教鞭を執っていた。中学の校長までやったと思う」。私はそう答えたのだが、「ドックス」という歌手のことをどうして私が知りえたのか、ちょっと驚いた様子だった。物に動じない態度こそが運転手の第一の仕事とばかりに、何事ごとがあっても（さほどのことはこのときまだ、起こっていなかった）冷静に対処していたラントが少しばかり内心を明らかにしたことが、印象に残っている……。

2017年9月、一週間に満たないほんの短い間だったが、マダガスカル島に行った。なぜマダガスカルに行くことになったのかはともプレイベートなことなのであえて書かないでおく。深夜に到着し、空港から暗闇の中、ホテルへ移動。その夜は前後不覚で寝てしまったのだが、首都アンタナナリボが私たちの前に姿を現わしたのは翌朝のことで、ホテルの部屋から眺めた朝日に輝く街並みは忘れがたい。どこまでも続くバラックの果てには巨大な一本の塔が建っていた。何階ぐらいあるのだろう。推測にすぎないが、50階くらいはあったのではないか。ヨーロッパの携帯電話の会社オランジュ

が建てた、まるで墓のような鉛筆状のビルは、初めてその島に降り立った者にも形状といい、屹立の仕方といい、言葉を超えた存在感を示していた。

子どもが小さい頃にディズニー映画で親しんだ(はずの)マダガスカルは、日本の1.5倍ほどもある大きな島だ。短い滞在時間で島全体を経めぐれば(おそらく国内便の航空機を使うことになるか、運転手を酷使して車をぶっ飛ばすか)移動だけに時間を食われてしまう恐れがあった。サンテグジュペリで有名なバオバブの木々は、今回は見送ることにしよう(次回はあるのか?)。首都のアンタナナリボ近辺で遺跡を巡ることにする。標高は高い。運転手のラントがホテルまで迎えに来る。1日定額制にした。1円が25アリアリ。ほとんどの人が初めて耳にする呼称の単位だと思うが、「アリアリ」がマダガスカルの通貨である。音の響きが少し可愛い。ただし貨幣がない。紙幣しかない。どんな小さな単位でも紙幣でやりとりする。たとえばトイレに入って用を足し、入口に坐っている女性にお金を渡すとき、100アリアリだと多すぎる、と言われる。でもじっさいにはそんなに小さな紙幣は財布に入れられないし、入らない。困惑して立ち尽くすしかない……。

話を変える。日常の些事に入り込んでしまうと、おそらく大半の紙数はそれに使ってしまうことになりそうだからだ。

マダガスカルは19世紀の終わりまで、メリナ王朝が治めていた。1883年、フランス軍は首都アンタナナリボ(当時の呼称)に進軍し、1895年、女王宮を砲撃する。ちなみに女王宮はそのときの砲撃によってあらかた破壊されているが、アンタナナリボを一望できる絶好の高台にあり、しかも中心地から至近であるため、いまでも観光に訪れる人は絶えない……。ラナヴェルナ三世は降伏し、1896年、フランスはマダガスカルを併合、翌97年にメリナ王朝は完全に解体させられた。

この年からおよそ10年後の、1908年、一人の青年がマダガスカルにやってくる。ジャン・ポーラン、24歳。のちにNRF(新フランス評論)という雑誌の編集長を長く務め、大戦間から戦中、戦後のフランス文壇を裏側から支える存在として辣腕を振るうことになる男は、いまだ何者でもなかった20代の3年間をマダガスカルで過ごした。

日本語で読める文献は数少ないが、ジャン・ポーランは手紙の人だった。ミシェル・レリス、アントナン・アルトー、フランシス・ポンジュ、ジャン・ジオノ、フランソワ・モーリヤック、その他…、綺羅星のごとき詩人、思想家、小説家と膨大な量の手紙のやり取りを実践した。これほどの分量の手紙を書き続けた人物を、私は他に知らない。手紙を交換することで、原稿を書かせ、あるいは批判し、あるいは称賛した。手紙のやりとりによって文学を作り出したといっても過言ではない。

筆まめな男は、むろん、マダガスカル時代にも少なくない書簡を残している。叔母にあてた手紙が最初のものである。「いま、お茶を飲んできたところ。毎日4時にお茶を飲む。習慣としていたこととはまったく逆。一杯のお茶と、お菓子が一皿。小さなお菓子は十分ある。今日はこれといった気晴らしもなかった。牛を一頭、殺した以外は、海は少しまた荒れてきた。海が動き始めると、病気になる人が多く出る」(1907年12月13日金曜日)。これはまだマダガスカルに到着する前の話だ。地中海を横断し、運河を縫うようにしてアフリカの東部に出た一行の船は、そのままアフリカ大陸を舐めるように南下し、マダガスカルの北部から島に上陸する。

ジャン・ポーランがマダガスカルに到着するのは、1908年1月8日。この島で「彼にとって、まったく対照的な赤い国を、魅力的な人々を、複雑な言語を発見し始める」、と、娘のクレール・ポーランは父親の評伝の中に書いている。「赤い国」の赤は共産主義とはまったく関係のない表現で、あの島の土の色が本当に赤いことに由来する。「彼らの精神の繊細さ、習俗の甘美さと奔放さ、主に配慮や思いやりで出来ている道徳心に触れていれば、私はマダガスカルをすすんで吸収していただろうに」。1913年、マダガスカルを去った後になって、ポーランはそう書いている、という……。ともあれ、ポーランは33カ月をマダガスカルで過ごした。彼の人生に強いインパクトを残した。その地で、彼は、たったひとりで、ゆったりと、夢見がちな青年期から大人の年齢に達するまで、過ごしたことになる。言語の形式や機能に対する彼の感受性は、外国語との接触によって磨かれた。マダガスカルの一家と暮らし、現地の先生たちを雇い入れ、昔から島に住んでいる人々の意見を聞きながら、民衆詩と呼ばれる「ハイン・テーニ hain-teny」を収集し、「闘いの諺」を

身につけた（マダガスカル語において、諺の重要性はつとに指摘されている）、ジャン・ポーランはパリに戻ったとき、彼が読む文学作品があまりに恣意的な物差しでしか判断されていないことに驚き、その判断基準を少なくとも最低限、恣意性を離れて複数で共有できるものにするべく、諺の有用性に着目したことは、あるいは有名な話かもしれない。だが、マダガスカルでの仕事は、学校の責任者。複数の現地の教師たちを使いながら、学校を運営しなければならなかった。自分でももちろん教えたが、教科は多岐に亘った。フランス語はもとより、ドイツ語、ラテン語、歴史、地理学、体育。そうしたものを植民地の子どもたちに教えた……。

マダガスカルでのポーランの暮らしぶりは、俄かに資料を収集していままさにこれを書いている私などよりも、すでに充実した研究があり、その成果が日本語でも公表されている。深澤秀夫氏の「言葉への旅 ジャン・ポーランのマダガスカル」（鈴木雅雄・真島一郎編、2000、『文化解体の想像力—シュルレアリスムと人類学的思考の近代—』所収、人文書院、ただし、私が参照したのは、この論考に加筆したWeb版）を参照されたい。深澤氏はそこで、多くの興味深い指摘を行っているが、ここでそのすべてを紹介するわけにはいかない。その一端を引用するにとどめたい。

タナナリヴに上ったポーランを待っていたのは、オガニュール総督が開設した〈タナナリヴ（外国人）中学校〉における「文学担当教授」の職であった。1908年の1月に開校された同校は、当初1年生・2年生・3年生の3クラス、9人の生徒から成るこじんまりとした学校として出発した。開校から二年近くが経った1909年11月には71人にまで生徒数は予想を上回って増加し、軍人と官吏の子弟および入植者の子弟がタナナリヴのみならず全土からやって来ていた。教員側は、校長1名、教授3名、講師5名、教諭4名の体制で出発し、1910年には文学と科学担当の教授がそれぞれ1名づつ増員され、翌年には高等課程も設置された。この中学校においてポーランは、生徒達に対してフランス語・ラテン語・ドイツ語・歴史学・地理学および体育を教え、時にはあまり才能がないにも関わらず歌唱の指導までを行う一方、1910年からは校長・舎監・出納役の三役をもこなし、『フ

ランス新評論』誌の編集主幹としての後年の勤勉と精力の片鱗を垣間見せている。

しかしながら、中学校が植民地体制の浸透・確立に歩を合わせて順調に発展してゆくのは対照的に、ポーラン自身は中学校の生徒達を教えることに対する情熱を次第に失っていった。この間の事情について、『カイエ・ジャン・ポーラン』第2巻の編集者たちは、ポーランがフリーメーソンに加入していなかったこと、プロテスタントであったこと、ダンスパーティーの席上での噂を広めたことなどのために、タナナリヴのフランス人社会に容易に馴染むことができなかったことを指摘している。(深澤 2000)

ポーランはフランス語を教えると同時に、マダガスカル語を習得した。単なる未知の言語への興味・関心にとどまらないポーランのマダガスカル語への傾斜は、それこそとても興味深いのだが、やはりここでは深入りする余裕がない。フランスに帰国したのち、マダガスカルの民衆詩(ハイン・テーニ)の収集と翻訳を公表したことはすでに述べたが、それだけではない。彼はマダガスカル語の教師も務めている。再び、深澤論文から引用する。

フランスに戻ったポーランは、1910年からの1年間、マダガスカル滞在中からその希望を洩らしていた国立東洋語学校におけるマダガスカル語講座の担当を務めている。1912年には、初めてハイン・テーニについての研究成果を「メリナ族のハイン・テーニ」と題した論文として公表し、翌年には、ポーラン自身が採集した800あまりにのぼるハイン・テーニの中から163首を選んで主題ごとに分類しフランス語訳を付した461頁にも及ぶ大著『ハイン・テーニ：マダガスカルの民衆詩』をパリで出版して世に問うた。(深澤 2000)

この『ハイン・テーニ』はポーランにとって晩年ともいえる1960年にも再販されており、ポーランの持続的な関心が窺える。もうひとつ、第一次世界大戦時のエピソードも、深澤氏の論文から紹介しておく。第一次世界大戦が勃発した際、ポーランは29歳。

伍長として出征した。そのとき、様々な植民地からフランス人入植者および植民地住民が合わせて55万人、ヨーロッパ戦線に兵士として駆り出された、とされる。「事態はマダガスカルにおいても全く同一で」あり、「大戦期間中、マダガスカルからは45000人以上のマダガスカル人が『志願して』参戦し、そのうちの41000人が兵士として12のマダガスカル人歩兵連隊に組織され、4000名あまりの戦死者を出した」とされる。1916年にポーランは自らマダガスカル人連隊への「転属」を希望し、「終戦までこのようなフランス語もあまりわからないままヨーロッパの戦場に立つことになったマダガスカル兵士たちに、自動車の運転などの技術を指導した」（深澤2000）……。

ポーランの心に去来したであろう様々な感情は、むろんさらに繊細な手つきで写し取られなければならないはずで、現在の私の能力を超えている。ただ、一つ気になるとすれば、ポーランがこれほどにもマダガスカルの民衆のことを気に懸けていたのなら、民衆詩以外の「文学」に対してはどのような考えを抱いていたのか、ということである。いや、民衆という言葉に拘泥しないほうがいいのかもかもしれない。もっと大雑把に言って、編集者・ポーランは、彼が立ち去ったあと、あの赤い土の島に芽生えたマダガスカル文学について、どんな知見を有していたのか、ということがどうしても（やはり）気になるのである。

2. 詩人にして政治家 ジャック・ラベマナンジャラ

ふたたび運転手のラントに登場してもらおう。

私は、どんな土地に行っても、言葉がわからなくても、現地の本屋には必ず入る。本屋には世界じゅうに共通する何かがある。言語ではない。紙の問題でもない。本屋と本屋にいる人々（店主も含め）には、言語を超えた、一種の連帯感がある。だから未知の空間であれ、本屋を探して入る。アンタナナリボに到着して何日目だったか、史跡をみて回ったあと、本屋に立ち寄りたいたいと思い、ラントに「マダガスカル文学」に詳しい店主がいる本屋はどこか、と尋ねた。同じ質問を東京でされたら、私自身は怒るに決まっているのだが（そ

んな細分化した本屋の情報など持っているはずがないではないか……), ラントは考えている。「ガイドブックによれば, 独立大通りに一軒, 大きな書店があるようなのだが……」と言葉を継ぐと, ラントはその店には言及せず, 私が宿泊しているホテルの真ん前に本屋があり, そこにきつというはずだ(いる, と言ったのか, ある, と言ったのか, いまでは判然としないのだが)と言う。視線を転じて, ホテルの前, 小さな商店が軒を連ねた, いちばん端にたしかに「本屋」の看板が出ている。夕闇が迫っている。急いで, その平屋の本屋に向かう。

迎えてくれたのは金髪を短くカットした妙齢のマダムで, 自分の店だから, という理由からか, 客が嫌がろうと構わないのか, 店内でスパスパ煙草を吸っている。とっつきにくくはないが, 近寄りやすいわけでもない。恐る恐る近づいて, マダガスカル文学でいちばん有名な作家や詩人の作品を紹介してくれないか, と言ってみる。いや単刀直入にそう尋ねたわけではない。今日はいい天気でしたね, とか, カメレオンってすぐに色を変えるわけじゃないんですね, とか, そんな話題を幾つか試みたあと, マダガスカルのことを書いた小説が数年前にあったのを覚えているか, あれはたしか「海の向うの記憶」というタイトルで, 書いたのはミカエル・フェリエという日本の大学でフランス文学を講じているフランス人作家で, 御祖父さんだか曾祖父だかが, サーカスの一員となってマダガスカルじゅうを巡る, という話ではなかったか, と水を向けたりしてみる。彼女は「ああ, そんな小説があったわね」と頷いてみせる。だからといって会話が弾むわけでもなく, 仕方がないので, ハルキ・ムラカミの翻訳はこの店でも売れているのか, と訊くと(このあたりになると, どうしてもっと直截に知りたいことを訊かないのか, 自分でも不思議だったのだが), もちろん売れている, ハルキ・ムラカミは面白いから, とマダムは即答する。今度は逆に, マダムが私に「あなたはハルキ・ムラカミをどう思っているんだ?」と尋ねるので, しばらく考えたあと, ハルキ・ムラカミは珍しい鳥のような存在じゃないか, と頓珍漢な答えをしてしまう。こちらは, なかなかメディアにも姿を見せないし, 東京に暮らしていても文学にまつわる様々な媒体や環境から一定の距離をとっていることを念頭に「珍しい鳥」と答えたのだが, マダムは村上文学の核心には「珍しい鳥」がいるのだと, どういうわけか強いインパクトを受けた模様で, 「そう, そうなの

よ」と、これもまた頷いて、で？ 本題は？ といった感じでこちらを見る。会話は迷路に入り込んでいる。先刻から切り出しにくく感じていたマダガスカル文学（フランス語では「リテラチュール・マルガッシュ」と発音するが、「マダガスカル」という意味の形容詞がどうして「マルガッシュ」なのか、どこか得心がゆかず、マルガッシュという音をつい強く発音してしまう……）の旗手の話をする。誰がもっとも有名か、マダガスカル文学を語るうえではずせない人物とはいったい誰なのか、と訊く。マダムは啜っていた煙草を右手に持ち替え、すたすたと店内を歩き始めたかと思うと、左手を使って手招きをする。

マダムは書架の一番下、足元の棚の一角を占拠していた、とある詩集を抜き出す。詩集といっても全詩集で、高さも幅も奥ゆきもおそらく20センチほどの直方体なのだが、およそ本の形状とは思えないそいつを抜き出すと、これ、と言わんばかりに私に差し出す。ジャック・ラベマナンジャラといって、マルガッシュ文学の最重要人物。それからもう一人推薦するなら……（と、棚を探す）ドックス、かな、と。ドックスについてはこの文章の冒頭に記したので繰り返さない。あなたの語学力ならいきなり作品を読むより、まず評伝を読むほうがいい、とこちらのフランス語力まで心配してくれるありがたさで、もちろん私は全詩集の購入を考えたのだが、いかんせん、日本に持ちかえるには嵩張りすぎる。マダムを説得し、300頁ほどの（つまり本としてはひどく凡庸な厚みの）ジャック・ラベマナンジャラの（これまた）評伝を手に入れたのだった……。

ジャック・ラベマナンジャラは、1913年にマダガスカル島の東部の湾に面した、小さな村で生まれている。1913年という年号に注意したい。ポーランがマダガスカルを去った3年後、つまり、二人はまったくのすれ違いだった。ジャックという名前もやや揺らぎを抱えている。1918年以後、たくさんいる従兄弟たち同様、ジャックもまた母方の祖父の手で育てられたが、彼のアイデンティティは揺らいでいたのだ。このころは仮の形ではあるものの「トアジディ」と呼ばれることもあったし、少し大きくなってカトリック教徒になった際には「ザカ」という名前を「ジャック」に取り換えている。以後も「ジャック＝フェリシアン」という呼ばれることがしばしばあったらしい。これは単なる名前の問題ではない。ラベマナ

ンジャラは、彼の書く詩の中で、アイデンティティの揺れに言及している、と、伝記を著したドミニック・ラネヴォゾン是指摘している (Ranaivoson 2015: 13)。名前が多様性を帯びていたことが、どこかでアイデンティティに影を落とす。

学校に通うようになると、その才能を開花させる。「エクセレントな学生だった」と、彼を担当した教師たちは口を揃えている。ラシーヌ、コルネイユ、ボシュエといったフランス文学の古典に親しみ、彼らのことをフランス文学のチャンピオンと形容した。そのあとは、ヴィクトル・ユゴー、ラマルチーヌを経て、ボードレール、ランボー、ミュッセという流れを辿る。まさしく王道。ただ、ここからはややローカルな印象のある作家へと彼の志向は傾いていく。ピエール・カモ、ロベール・ブードリィといった面々。周知の有名な作家たちへの関心から離れ、自分の嗅覚で探し出した文人たちを読み込む。同じことは、こうした読書傾向と同時に彼が創刊からかわったとされる (1930年代の、ということは彼が20代ということだ) 「マダガスカル青年雑誌」に寄せた彼の文章からも窺い知ることができる。「マダガスカル人であろうとすればするほど、どんどんフランス人になっていく」という逆説を生きることになったラベマナンジャラは、声も高らかに雑誌にこう書きつける。「私たちの目的は、マダガスカルのネイションの個性を浮き彫りにすること、外からやってくる強い吸収作用に抵抗すること、というのも、《深い溝はいつもそこにあって、マダガスカルのナショナルリティをがつつと飲み込んでやる、と脅しているのだから》。だからこそ雑誌は、《忘却されている、過去の偉大な人物たちをもう一度蘇らせる仕事を担う。いまだ眠り込んだままのナショナルな才能を目覚めさせること。マダガスカル語を称揚すること。なぜなら、自分たちの言語を衰退させ、ずっと続いてきた過去の伝統をまとめて捨て去ろうとする人々は、未来なき、衰亡の危機に瀕した民衆だからだ》」 (Ranaivoson 2015: 26)。

しかし、この雑誌は当時の植民地政府から発禁処分を受けることになる。2年弱しか出せなかった。一方、パリで、1939年、フランス革命から150年を記念する式典にも、ラベマナンジャラは参加する。パリに留まり、パリ大学 (ソルボンヌ) に登録し、古典文学を研究する。このとき、未来のセネガル大統領レオポルド・セダール・

サンゴールや、雑誌「プレザンス・アフリケーヌ」を創刊するアリウヌ・ディオプに出会っている。ジャックは一生、「プレザンス・アフリケーヌ」に協力を惜しまなかった。

1946年、ラベマナンジャラは、「マダガスカルの改革のための民主運動」(Mouvement démocratique pour la rénovation malgache, 略してMDRM)に参加する。書記官を任される。同じ年、マダガスカル議会で議員に選ばれるが、1947年のマダガスカル暴動において、その首謀者の一人との嫌疑をかけられる。そして逮捕、拘留……。最初はマダガスカル、それからマルセイユに移送された。1956年になってようやく恩赦により釈放される。1960年にマダガスカルがフランスから独立する直前のことだった。

皮肉なことだが、服役している間に、ジャック・ラベマナンジャラは詩を書いた。『Ansta』は1947年、『Lamba』は1956年に編まれた。これらの詩集は彼をして、ネグリチュード運動(簡単には説明するのが難しいが、黒人性を覚醒させる文学運動、くらいか)の担い手の地位に押し上げることになる。

彼がマダガスカルに戻ることを許されたのは、1960年だった。島が独立を果たした直後のことだ。マダガスカルの抵抗運動のヒーローと見なされた彼は、またしてもマダガスカル議会で議員に選ばれる。その後、大臣、それから副大統領へとのおぼりつめる。1972年の「革命」ののち、居場所を失った彼はふたたび故国を離れ亡命する。そして死ぬまでフランスで暮らすことを選択した。1992年になってようやく帰国することが可能になった以外は、

ジャック・ラベマナンジャラは2005年にパリで亡くなっているから、決して短い生涯というわけではなかったが、身柄を拘束され投獄されていた9年の間、彼が考えて書き溜めた詩があって、それが彼の文業の中核をなしていることは間違いないだろう。最晩年にどのような詩を書いていたのか、いまの私には知りようもない。幾つか言えるとすれば、1947年の投獄から1956年の釈放までが、彼の中で文学がゆっくりと発酵していく時間だったのでは、ということである。くだんの評伝にはこう書かれている。

ラベマナンジャラは、様々な刑務所で《独房の四つの壁に囲まれて夜と昼》の9年を過ごした。いくつかの詩の下のほうに

書き込まれている日付と場所のおかげで、彼の軌跡をたどることは可能だ。まず、アンタニモラ。タナナリヴの刑務所に入る。そこから、アンタニナレニアへ移送される。安全な隠れ家での取り調べのため、という理由から。そこで彼は書く力を発見する。自分が闘争的なエネルギーに突き動かされていることを自覚する。《タナナリヴの刑務所について》、1947年5月、長い詩を書く。それは、「バコリのための小話」(Conte pour Bakoly)と題されていて、詩集『Antidote』の最初に置かれている詩である。8音節が交互にあらわれる自由詩で、暴力への屈従をテーマにしている。三人称を用いることで、対象への一定の距離を保ちえている。(Ranaivoson 2015: 133)

詩集『Antidote』は、1961年、プレザンス・アフリケヌを版元として刊行された詩集で、冒頭の詩には、こんな一節がある。

私は眼を閉じ、こぶしを握り締める
手錠に呪いの言葉を吐き
死刑執行人の傲慢さを非難し
死に魅入られて働くすべての者の
顔と背中に激しい非難を浴びせる

拷問と夜の
灼熱の使者たちよ!

やつらは、ベテル〔ビンロウジュの実に石灰を加えて練り、キンマの葉で包んだ清涼剤〕を噛むように、肉食動物の獰猛な歯で、デコボコした音節を噛みくたく

おまえの名前? 虎の顔をした男が嘲笑う
やつは怖いのか? 家具を動かしたあとの埃の中にさえイロニーを感じるのか?
大鉈の柄の部分の細やかな指づかいで撫でている
やつはまだその一線を越えることを躊躇しているはず
いい加減な本能が人間の本質と葛藤を演じているその線を

そんなことはどうでもいい！ チンパンジーたちの優位を信じなければならなかったし
やつらの話すわけのわからない言葉に注意深く耳を傾ける準備をしなくちゃならなかった

おまえの名前？ 虎の顔をした男が嘲笑う

私は、北側についている屋根窓から
星が輝くのを見る
目の端に溢れる涙のようであり、
無辺の真ん中にはめ込まれたダイヤモンドのようでもあった
(Rabemananjara 1961 : 10)

長大な詩篇のほんの一節だが、暴力的な牢獄での拷問と拘束を詩の形にまとめあげていることがよく理解される部分だろう。前述したように、この詩集が刊行された60年代初めから1972年まで、ラベマナンジャラはマダガスカルに「凱旋」し、政治家の道を歩んだ。フランス自治領マルガシュ共和国を経て、マダガスカル共和国として自立する期間だった。だが1972年、フィリベール・ツィラナナ大統領は失脚し、彼の政権と関係深かったジャック・ラベマナンジャラも政治家としての職を解かれた。伝記では、ジャック・ラベマナンジャラはあまりこのあたりの政変のことを語らないと書いている。学生たちの反乱が発火点となったこのときの「革命」に関して、本当にラベマナンジャラ本人が口を噤んでいるようだが、学生たちのデモ行進に参加し、体制に怨恨の感情を抱いていたミシェル・ラコトソンは、後年、ジャック・ラベマナンジャラにインタビューを試みたことがある、という。ずいぶん時間が経ってしまっても、この点に関しては質問を避けており、ツィラナナ大統領によって命じられた鎮圧行動を思い出しつつ、「われわれは学生に発砲しなかった」と語るにとどまった、と評伝の中では述べられている（ただし、ミシェル・ラコトソンの箇所は、以下の典拠による。Michèle Rakotoson, 《Lettre à Jaques Rabemananjara》, Les Nouvelles, 11 avril 2005）。

以後、政治家としてのラベマナンジャラは、90年代に経済危機

に陥ったマダガスカルを救済しようともう一度、政治家として復活を遂げようとしたり、あるいは詩人として雑誌「プレザンス・アフリケヌ」に詩を発表したりした。晩年に到る業績については、別の文章を用意しなければならないだろう。

私が一貫して気になっているのは、ジャック・ラベマナンジャラの政治家としての最盛期が、ほぼ1960年代と重なっていること、そして、それは若い頃にマダガスカルで3年を過ごし、NRFの編集長として辣腕をふるったジャン・ポーランの晩年と重なっていること、である。

3. 2人の60年代

ポーランの60年代は、やはり雑誌とともにあった。1960年1月号の「NRF」は、アルベール・カミュを特集している。前月、自動車事故で急逝した世界的な作家をめぐって、ポーランはマルセル・アルランと討論。以後、主な活動を拾ってみよう。1961年5月、カンヌ映画祭で審査委員。62年11月、「ペルスの謎」と題する作家論を「NRF」に寄稿。63年1月、アカデミー・フランセーズで選挙（議長はピエール・ブノワ）。64年、アカデミー・フランセーズで演説。66年、全集の第1巻・第2巻が刊行される。67年、「ジャン・ポーランとその周辺」という博覧会がジュネーヴで開かれる。全集第3巻が刊行。68年10月9日、ヌイイの病院にて死去。何か、突然訪れた死、という感じがしないでもない。全集が刊行され（革でできた立派な造本のこの全集を、私はとある大学図書館の暗がりで見ることがあるが、現在入手可能の、21世紀になってから刊行されたガリマール版とは違うもの）、アカデミー・フランセーズ会員にも選出され、望みうる栄誉を手にしたあとの、死ではなかったか。

むろん、ジャック・ラベマナンジャラはポーランとは無縁の生活を送っていた。ラベマナンジャラの60年代は前述したごとく、政治家としての絶頂期だった。たとえば、ポーランの全集が刊行され始めた66年、ラベマナンジャラは農業大臣に就任している。2人の生活はすれ違い続けたのか。おそらくは（そしてかなりの確率で）その通り。ポーランの書いたものの中に、初期の幾つかの文章を除けば、

マダガスカルは出てこない。逆に、ラベマナンジャラがポーランを論じた文章は、私の調べる限りにおいて存在しない。もちろん、どこかにそんな文章がないわけではないだろうし、私が見落としたただけ、という可能性もある。ただ、いまはむしろ、若者たちの「革命」によってマダガスカルを追われたジャック・ラベマナンジャラが、パリに居を構え、幾つかの波風は立ったものの、2005年に没するまでの、少くない時間をパリで過ごしたことのほうが興味深い。

1973年以後のパリ。それは、ジャン・ポーランがこの世を去った後のパリでもあった。そして、この文章を書いている私のたった一つの心残りといえば、あの、アンタナナリボの、私が滞在したタンボホ・ホテルから見える書店の金髪のマダムに、あなたはマダガスカル時代のジャン・ポーランをどう思っているのですか？ と、尋ね損ねたことである。「そんな昔の人、覚えてないわ」とマダムは嘯いただろうか。

ジャン・ポーランは終生マダガスカルのことを気にしつつも、二度と、あの赤い島の土を踏むことはなかった。

[文献]

Rabemananjara, Jacques, 1961, *Antidote*, Paris: présence africaine.

Ranaivoson, Dominique, 2015, *Jacques Rabemananjara, Poésie et politique à Madagascar*, Paris: Editions Sépia.

深澤秀夫, 2000, 「言葉への旅 ジャン・ポーランのマダガスカル」鈴木雅雄・真島一郎編『文化解体の想像力——シュルレアリスムと人類学的思考の近代』人文書院, 321-361, (2017年12月24日取得, <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/report/jan/1.html>).